

書評

齋藤元子著

『女性宣教師の日本探訪記 ——明治期における
米国メソジスト教会の海外伝道』

(新教出版社、2009年、240頁＋文献18頁、2800円＋税)

野村 誠

日本ウェスレー・メソジスト学会会員、齋藤元子氏が『女性宣教師の日本探訪記』を出版されたことは、同じ学会の会員として慶賀に耐え得ない。この本は、齋藤元子氏が「お茶の水女子大学」に博士論文として提出したものを基にして出版したものである。この本は副題に記されているように「明治期における米国メソジスト教会の海外伝道」という斬新な視点から論述されている。本の帯に内容をまとめた次のようなコメントが載っている。すなわち「開国日本の最新情報、馬で旅した蝦夷探訪記、日露戦争レポート、横浜山手での女性雑誌作り……。彼女たちの伝道活動は、日米の女性たちに向けた『地理的知識』の普及活動でもあった。地理学史の視点から明治期の女性に着目し、異文化間コミュニケーションのあり方を探った貴重な労作」。

本書は以下のような内容から構成されている。

第 I 部 女性海外伝道運動

第 1 章 女性宣教師の誕生

第 2 章 メソジスト監督派教会女性海外伝道協会とその機関誌

第Ⅱ部 ドーラ・スクーンメーカー

第3章 スクーンメーカーの日本報告

第Ⅲ部 メアリー・ホルブルック

第4章 ホルブルックのみた明治期の日本

第5章 ホルブルックの蝦夷探訪記

第Ⅳ部 ジョージアナ・ポーカス

第6章 ポーカスのみた明治後期の日本

第7章 雑誌『常磐』

第8章 海外旅行記

原史料翻訳 「日本」

「東京・横浜・函館・長崎」

「日本の花々」

「日光での休暇」

「函館とアイヌ集落」

第Ⅰ部では、多くの女性宣教師をアジア、アフリカの異教地に送り出したアメリカの女性海外伝道運動を概観した上で、米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会の活動内容を示し、その機関誌の「地理的知識」の伝達媒体としての役割を明らかにしている。第Ⅱ部から第Ⅳ部までは、3人の女性宣教師の文筆・出版活動に光を当てている。第Ⅱ部のドーラ・スクーンメーカーは、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会が日本に派遣した最初の女性宣教師である。第Ⅲ部のメアリー・ホルブルックは、明治初期の日本に関する多数の報告を機関誌に書き送っている。第Ⅳ部のジョージアナ・ポーカスはジャーナリスト宣教師として、明治後期の日本の様子をアメリカに伝えるとともに、『常磐』という日本語の女性啓蒙雑誌を発行していた。

著者は、「女性宣教師が明治期の女子教育の一翼を担ったことは、今日広く知られている。しかし、彼女たちが日本に関する知識を頻繁にアメリカに伝えていたことや世界についての知識を日本の女性たちに授けていたことは、これまでほとんど語られてこなかった。」(17頁)と指摘し、「本書は、明治期

に来日したアメリカ人女性宣教師を、「地理的知識」の伝達者・普及者と位置づけ、彼女たちを媒介とした19世紀後半の日米間における「地理的知識」の傳播の内容を明らかにしてものである。」(223頁)と述べている。

事実、開国まもない明治期の日本の文化、伝統、習慣など、地理的知識と日本の社会を男性の宣教師には見ることでできない女性の視点で、女性のことばで欧米の社会に伝えたということが重要である。

少し内容に触れると、第IV部では、日露戦争など日本の時事問題や世相をアメリカのメソジスト監督派教会女性海外伝道協会本部に当てて報告を続けたジャーナリストとしてのジョージアナ・ポーカスに着目している。著者は、ポーカスのジャーナリストとしてのスタンスを、与謝野晶子のような反戦の姿勢は見られず「ラディカルなものではなかった」(169頁)と評している。しかし、その一方で、『常磐』が時事問題を論ずることが許されなかった「出版条例」の枠内にとどまりながらも、同じキリスト教女性雑誌で時事問題に取り組む道を選択した『婦人新報』(東京婦人矯風会発行)を陰ながら支援していたことを著者は明らかにし、ポーカスが時事問題に無関心ではなかったと指摘している点(189～190頁)も見逃すべきではない。

『常磐』は、著者によれば、羽仁もと子の『家庭之友』『婦人之友』にヒントを与えた雑誌としての可能性は高く、日本の女性雑誌ジャーナリズム史のなかで意味をもつ存在である(196頁)。この指摘は、全く埋もれた状況にあった『常磐』に光を当てたと同時に、日本の女性雑誌ジャーナリズム史研究に一石を投じるものであろう。

原史料翻訳は、当時の日本文化を知る上で重要である。女性宣教師メアリー・ホルブルックが、1881(明治14)年、馬に乗って北海道を探訪し、アイヌ集落(対雁:現江別市)を尋ね、生活の様子、習慣などを報告している「函館とアイヌ集落」が特に興味深い。「不平等条約を背景とする権威」(126頁)に守られた白人の視点からの旅とはいえ、蝦夷探検を米国の女性たちに伝えたことは、評価されるだろう。

ホルブルックは、日本の中央の横浜・東京についての報告をすでに行っている。そして「ホルブルックの蝦夷探訪記は、自然地理と人文地理の要素を盛り込んだ地誌であると同時に、中心に続いて周縁を描き出したことにより、

多様な日本の姿を提示している。」(132頁)と著者は述べている。

白人特権階級としての馬上からの目線では搾取され抑圧されている民衆の苦渋を理解することは困難であり、キリスト教にとって日本伝道の前に立ちはだかる「沼地」(遠藤周作)ともいわれる日本文化との対決は、今後の課題として著者に期待するところではあるが、東京連回所属のメアリー・ホルブルックがアイヌ女性への伝道に触れていない点を、メソジスト教会の監督制に起因するものではないかとする著者の見解(130～131頁)は、メソジスト研究にとって、興味深い指摘であろう。

この書物を刊行してくださった「日本ウェスレー協会・ウェスレー研究基金委員会」に感謝を忘れることはできない。

(共愛学園 前橋国際大学 准教授)